

## 2024年に見た映画から 日本映画篇

2024年の日本映画の特徴の一つとして、1990年代生まれの若い映画監督の台頭が挙げられます。空音央（1991~）清原惟（1992~）内山拓也（1992~）奥山大史（1996~）そして山中瑤子（1997~）といった人たちがです。筆者は彼らの新作をすべて見ることはできなかったのですが、山中瑤子『ナミビアの砂漠』に強く惹きつけられた一人です。「自然」で「等身大」の現代女性を見事に描いた山中瑤子の手腕は高く評価されるべきでしょう。また、これはどの映画制作に携わる人たちに言えることですが、制作する環境が整備され、次回作がなるべく早く（もしくは適宜に）登場することに期待を寄せるものです。どうも世代別に映画作家を取り上げるのはステレオタイプな手法と思われるかもしれませんが、敢えてそうすることにします。

1980年代生まれの映画監督からは、森井勇佑（1985~）『ルート29』、草野翔吾（1984~）『アイミタガイ』、藤井道人（1986~）『青春18×2 君へと続く道』『パレード』（NETFLIX作品）、三宅唱（1984~）『夜明けのすべて』が強く印象に残ります。森井勇佑はデヴュウ作『こちらあみ子』（2022）に次ぐ二本目の作品で、何とんでも大沢一菜のキャラクターに依るところが大きいのですが、このロードムービーは独自の感性から語り口とストーリー展開を確立したことを示すものとして、草野翔吾作品はそのハートウォーミングさから心惹かれる作品となりました。三宅唱作品然り。三宅唱は、前作『ケイコ目を澄ませて』（2022）からの好調を維持しています。鋭い人間観察を行うながらも優しさと暖かさの感じられる映像表現を可能にした三宅唱の実力は高く評価できます。藤井道人もこの特に優れた二本の作品の他にも『正体』を発表しているようで、存在感を大いに強めました。2024年はハートウォーミングが一つのキーワードだったのかと筆者は思うのですが、これは生き辛さの増した世間（世界というほど大きくないもの）への反発の表れでしょうか。1970年代生まれの吉田恵輔（1975~）『missing』、呉美保（1977~）『ぼくが生きている、二つの世界』の作品からも十二分に感じられるものです。吉田恵輔、呉美保はいずれも映画監督としての実績と実力を具えた人で、特に呉美保は2015年の『きみはいい子』以来の新作で期待に応えた作品です。

1980年代生まれの映画作家からは、真理子哲也（1981~）という才能豊かな人物に筆者はこれまで注目を続けていますが、2019年の『宮本から君へ』以降、作品の発表がないのは寂しい限りです。また、深田晃司（1980~）、早川千絵（1976~）の新作にも期待したいところです。一方で、小田香（1987~）が長編作『Underground』を発表したとかで、2025年に国内公開が始まるとも伝えられ期待が募ります。荒井晴彦（1947~）の活動（脚本・監督）にも今さらながらの期待をかけています。2024年には、濱口竜介（1978~）『悪は存在しない』もありましたし、1950年代生まれからは石井岳龍（1957~）『箱男』黒沢清（1955~）『Cloud』もありました。『箱男』は、安部公房の独自の世界、特に1970年代半ばに向けてのポスト政治の時代の空気感が感じられるとともに現代の匿名性をはじめとした不条理性が感じられるものでした。これは一つのノスタルジーでもありました。

個人的に2024年は、プロデューサー大塚和（1915~1990）と映画監督成瀬巳喜男（1905~1969）の二人に焦点を当てた年でした。大塚和は、日活のプロデューサー時代（1955~1974）に今村昌平、浦山桐郎、藤田敏八、神代辰巳らをデヴュウさせ、日活を退いた後も長谷川和彦をと有能な人材を世に送り出したという大

変な功績をある人物です。日本映画界の絶頂期から衰退期、絶滅期まで厳しい時代を生き抜き、プログラムピクチャの中できらりと光る作品をプロデュースしてきました。決して埋もれさせたくない（埋もれさせるべきでない）作品がその中にあります。今村昌平のデヴェウ作『盗まれた欲情』（1958）、中平康『密会』（1959）『地図のない街』（1960）『当たりや大将』（1962）、若杉光夫『川っ風野郎たち』（1963）、蔵原惟繕『愛と死の記録』（1966）、神代辰巳のデヴェウ作『かぶりつき人生』（1968）といった作品がそれです。

また、2024年に見て、すでに高い評価を得たものもありますが、改めて再評価すべき（されるべき）作品だと強く感じたのは、市川崑『処刑の部屋』（1956）、浦山桐郎『私が棄てた女』（1969）、工藤栄一『大殺陣』（1964）、豊田四郎『甘い汗』（1964）、深作欣二『軍旗はためく下に』（1972）、熊井啓『日本列島』（1962）、川島雄三『青べか物語』（1962）、岡本喜八『ああ爆弾』（1964）といことになりますか。2023年9月のヴェネチア国際映画祭で最優秀復元映画賞を受賞した相米慎二（1948~2001）『お引越し』（1993）は、ヨーロッパでの公開の後、北米、台湾でも上映されているとのことで、フランスのルモンド紙で「傑作」と1面に見出しを打って文化面の一頁を割いたという記事も出ています。（日本経済新聞2004年12月18日）『夏の庭』のリマスター版の国内公開も始まるようで相米慎二の再評価の動きも高まりそうです。

最後に追悼の意を込めて今年亡くなられた白井佳夫、渡辺武信、白鳥あかね諸氏について。白井佳夫氏（1932~2024）は元キネマ旬報編集長であり映画評論家として活躍されました。筆者の個人的な思い出としては、1976年から始まった湯布院映画祭の第二回目に参加（当時どこかは忘れましたが雑魚寝状態の宿を紹介してもらい、3日間だかをそこに集まった方々と映画を見て酒を飲み映画を語るという幸福な時を送ったのでした）しましたが、亀の井別荘の中谷健太郎氏（元東宝の助監督の経験をお持ちです）らが中心となって「映画館のない街で映画祭を」ということで手作り感あふれる素敵な映画祭が始まり、白井佳夫も東京から参加するとともに数人の映画人を多忙なスケジュールを割いてこの映画祭に招待しました。筆者が参加したときには、長谷部安春監督、村野鐵太郎監督、俳優の藤竜也、中川梨絵、佐藤蛾次郎諸氏が来られ、貴重な話を伺った覚えがあります。白井氏が、学生時代に黒澤明の「蜘蛛巣城」（1957）に鎧武者としてエキストラ出演されたという話を聞いたのはこの時だったのでしょうか。著書「日本映画のほんとうの面白さをご存知ですか？」の第II章「日本映画における義理と人情」の中の『広能昌三の場合』で「原作は、広島ヤクザ美能組の元組長、美能広三の獄中手記を元に書かれた飯干晃一の実録小説で、これを『博奕打ち 総長賭博』の笠原良三がシナリオ化した」という記述があり、あってはならない過ちを犯した人でもありました。（講談社1981年6月15日第一刷発行114頁から115頁にかけて）

詩人で建築家であり映画評論家だった渡辺武信氏（1938~2024）は、日活アクション映画の系譜を詳細に渡って書き残した非凡な映画評論家でした。

白鳥あかね氏（1932~2024）は、1955年に日活撮影所にスクリプターとして入社し、その後シナリオライターとして神代辰巳を始めとした監督を支えてきた方でした。

ご冥福を祈ります。